井原哲夫著『巨大都市と人口構造
―その“集中”のエネルギー―』

毎日新聞社，1973年，202ページ

本書は「現在の社会問題の多くは人口の都市集中が根源であり……人口の地方分散によって，これらの都市問題を解決しようとする発想」のもとに，「人口の都市集中のメカニズムを明らかにし，……人口分散の方法を示す」ことを目的とした第1部「人口集中のメカニズム」と巨大都市における人口編成（ドーナツ化現象，夜間人口，昼間人口，世帯）および産業分布について，「その背後にあるメカニズムを明らかに」しようとした第2部「巨大都市の行動科学」の二部からなっている．

本書に流れる基本的な考えは，表面的にはきわめて複雑な動きをしているように見える人口の都市集中および巨大都市の人口構成の背後には「厳然とした法則」が働いており，この法則の発見こそが，人口集中から生じる都市問題の解決，都市の再開発，人口の地方分散の方法を見いだすために必要である．という考えである．著者はこの「法則」を「人は有利な就業機会を求めて移動する」という人口移動に関する前提のうえに「都市収支」という概念によって明らかにしようとする．「都市収支」という概念はあまり明確ではないが，「国際収支に似た尺度」であって，一つの都市における商品，サービス等の移出入のことであり，都市の発展との関係でまとめれば，次のようになるという（P.49参照）．(イ)都市の移出が増加すればするほど都市の人口は増加する．(ロ)自給率が高いほど移出の増加したときの人口増加効果は大きい．(ハ)国全体の経済成長率が高いほど，ある都市の移出が伸びたときの人口増加効果は小さい．(ニ)国全体の一人当りの所得が小さいほど，ある一定の移出額が増大したときの人口増加は大きい．そしてこの「都市収支」を数量化してとらえることによって都市の盛衰と人口集中をみようとるるものである．それゆえに「都市の魅力」とか「集積の利益」とかはこの「都市収支」の社会学的ないし経済学的表現ということになる．

ところで，著者の述べるところから判断するとこの「都市収支」を決定づけるものは都市の産業構造の性格である．ゆえに「都市収支」概念は都市の産業構造から生じる諸結果を金額に換算して数量的に示そうとした概念であるといってよい（P.42の「都市収支勘定表」参照）．しかしながら，以下の叙述は数量化してとらえられておらず，もっぱら諸都市の産業構造の特徴によって説明されている．

このようにみるならば，こと新しく「都市収支」というような概念は必要としないのであって，産業構造は歴史的に変化してきたのであって，この歴史的変化に対応した産業を持つ都市に人口が集中し，都市が発展したといってよいのではないだろうか．必要なことは，現代において産業構造と人口の関係をもっと具体的に分析することが，現代都市の人口集中のメカニズムを明らかにすることになるのではないだろうか．
ともあれ，著者は諸都市の産業構造を分析することを通して，現代巨大都市の主要産業（移出産業）が管理販売機能と第三次産業であることを明らかにした．そして管理販売機能と第三次産業こそ「集積の利益」を条件とし，「都市の魅力」を決定づけるものなのであり，第二次産業は交通の発達とその製品の性格からして「集積の利益」をもはや必要条件としていないのである．それゆえに，著者は，人口分散は管理販売機能と第三次産業の分散を主張する．しかし，それ自体が「集積の利益」を必要とするので，本書の大井町の例にもみられるように不可能に思える．

第二部においては，巨大都市の人口構成の特性を地価（住宅問題）と通勤時間のバランスの結果から説明している．

本書は従来，デモグラフィックな分析が単なる現象の羅列にかたむいていたものを，産業構造と人口統計を組み合せることによって，人口の都市集中と巨大都市の人口構成特徴を形づくる要因の分析まで進めたものといってよいであろう．

（柴田　弘捷）